

# ミシンから時代を見る



広島工業大学名誉教授 中山勝矢



(写真1) 初期に作られた足踏み式の国産家庭用ミシン(JUKI株)の展示室にて)

以前は、どこの家庭にもミシンがありました。ミシンとはソーイングマシン(裁縫機械)のことですが、不思議なことに誰もマシンといわずに、ミシンと呼ぶのです。

すべての衣類を手縫いでいた時代、とくに子育て中の女性にとり、ミシンは家事のイノベーションでした。間違いなく、家庭生活の機械化を先導したといえます。(写真1)

経済発展の途上にある国々で、自分のため、家族のために懸命に働いている多くの女性たちにとっても同じで、ミシンは自分たちを経済的に飛躍させる道具なのです。(写真2)

## ● いっごろ誰が…

ところでミシンは1790(寛政2)年、イギリスのT. セントという指物師が奥さんの裁縫を見ていて機械化を考えたことが始まりとされ、それ以降、開発が競われるようになりました。

約40年後の1829(文政9)年、フランスのバルテルミー・ティモニエが実用化に成功。1842(天保13)年には50台のミシンが軍服の仕立てに使われたといわれています。

1851(嘉永4)年ロンドンで開かれた第1回万博に、ナポレオン3世の勸めで出品しますが、スピードを狙い単純化を進めていた米国のシンガー社に遅れを取ってしまいます。

仕立て職人の賃金は安く、しかも失職を恐れて職人がミシンの導入に強く反対したため普及が難しく、ティモニエは1857(安政4)年、貧窮のうちに世を去りました。

さて最初に日本に渡来したのは1860(万延元)年で、咸臨丸で帰国した中浜万次郎がカメラとミシンを買い求めて持ち込んだことによります。とにかく当時は珍品でした。

明治時代はもっぱら輸入で、国産品が現れたのは1881(明治14)年の第2回勸業博覧会ですが、その後も幾多の改良が続きます。光学機械とミシンは精密機械の代表でした。



(写真2) 外の光に頼りながら、足踏み式ミシン1台で仕立ての仕事をするフィリピンの女性  
(JICA's World 2012.9月号から)



(写真3)豊富な機能を搭載した最近の家庭用ミシン（JUKI株の展示室にて）



(写真4)工業用ミシンが並ぶ縫製工場の現場モデル（JUKI株の展示室にて）

昭和になって国産化への基礎が固まり、ミシンを大量に生産するための工場も建てられました。性能も輸入品に劣らないレベルとなり、ミシンを並べた縫製工場も誕生しました。

一方でミシンは、急速に家庭に入っていきます。デモクラシーとモガの時代、その裏側には既製衣類とミシンによる家事からの開放があったとしても過言ではないでしょう。

## ●世界への貢献

いま住んでいるところの近くに、アパレル向けの工業用ミシンメーカーとしては世界トップ、家庭用で第3位のJUKI株があります。そこを訪ねて話を伺いました。

第二次世界大戦のときは軍需工場だったそうですが、戦後1947(昭和22)年3月にはいち早く家庭用ミシンの生産工場に転向し、再出発したのだという説明でした。

当時はモノのない時代ですから、家庭用ミシンの需要は想像を超えるものがありました。1951(昭和26)年の第1回から55年までの5年間は、何とお年玉付き年賀ハガキの特賞でした。

そのうえ1953(昭和28)年には、工業用ミシンが恩賜発明賞に輝きました。現在工業用ミシンの生産台数は年間約50万台に達し、世界で30%のシェアだそうです。

技術的にも着実に進展しています。写真1はJUKIが作った初期のころの家庭用ミシンなのですが、電動ではなく、足踏み式です。古い時代のシンガーミシンにそっくりです。

どこでも十分に電気が届く時代になると家庭用ミシンも電動式が主流になり、さまざまな機能が付くようになりました。デザインも斬新だし、見た目は様変わりです。(写真3)

工業用ミシンもスマートだし、近代的なイメージです。途上国にはこうした工業用ミシンがズラッと並んだ工場が数多く作られ、女性たちに雇用を提供しています。(写真4)

いま衣料品の店には既製の服や下着が並んでいます。そのタグを見ると、ほとんどのものの産地がアジア各地であり、中国、ベトナム等々からの輸入品であることが分かります。

万次郎がミシンを持ち帰って約150年。その間にわれわれが磨いた技術により、世界の人々は豊かさの階段を登っています。このことを、しっかりと自覚したいものであります。

HP <http://www.juki.co.jp/>